

金比羅山窯跡群出土の有溝把手

伊藤 雅文

はじめに

金比羅山窯跡群は石川県小松市那谷町に所在し、1983・1984年の両年度にわたって発掘調査が行われた。その結果、7世紀代の11基の須恵器窯跡と日本海側では唯一となる8世紀初頭の横口式石槨が検出されるなど、北陸古代史を考える上で重要な遺跡である^{(1)～(3)}。

本窯跡群出土遺物のうち、1点の平瓶が石川県歴史博物館常設展に貸し出されていたが、同館のリニューアル工事に伴って平成25年度に返却された。この資料は、肩部にヘラで「与野評・・」と刻まれており、7世紀後葉の支配体制を知る上で考古学のみならず古代史学からも注目を浴びる遺物であった。しかしながら、この土器には刻文各所が欠失しているため、文章の全貌がわからないのはきわめて残念であった。もしその部分が発見されれば銘文の意味が明確となり、よりいっそう資料的価値が高くなることは確実である。

平瓶の状態は接着剤が経年により劣化しており、再接合が必要な状態であった。そこで、その前に再度欠落部分の破片搜索を伊藤が実施した。この作業において未実測品の有溝把手を確認し、本県で類例の少ないことから、資料紹介をおこなうものである。本窯跡群におけるこの種の把手の出土は6号窯跡からがあり、2例目である。

資料紹介

本資料は1984年調査で「4G 攪乱層」と記され、窯跡群の遺構から遊離した状態で出土していることがラベルからうかがうことができる。

把手は、現存長5.1cm、把手幅3.7cm、同厚さ2.6cm程度を測る。把手としては完形であるが、鍋もしくはコシキ本体から脱落しており、接着面には本体の調整痕と思われるカキメ状の痕跡が横方向に確認できる。把手は、基部からすぐに斜め上方に屈曲し始め、中ほどでその角度が強くなる。把手の成形は手によるものであるが、基部を中心にヘラのような工具によってナデつけられており、その痕跡が明瞭な稜となって観察できる。把手先端下面はナデつけられたり押圧されたりしており、指紋を残す部分もある。これらのことは、ナデ成形された把手を本体に取り付けた後にヘラで基部を中心にナデつけて密な接着を試みたものである。把手上面には、それを本体に接合した後、ヘラによって切り込みが入れられている。切り込みの溝は本体との接合側から把手先端に向かって施されている。

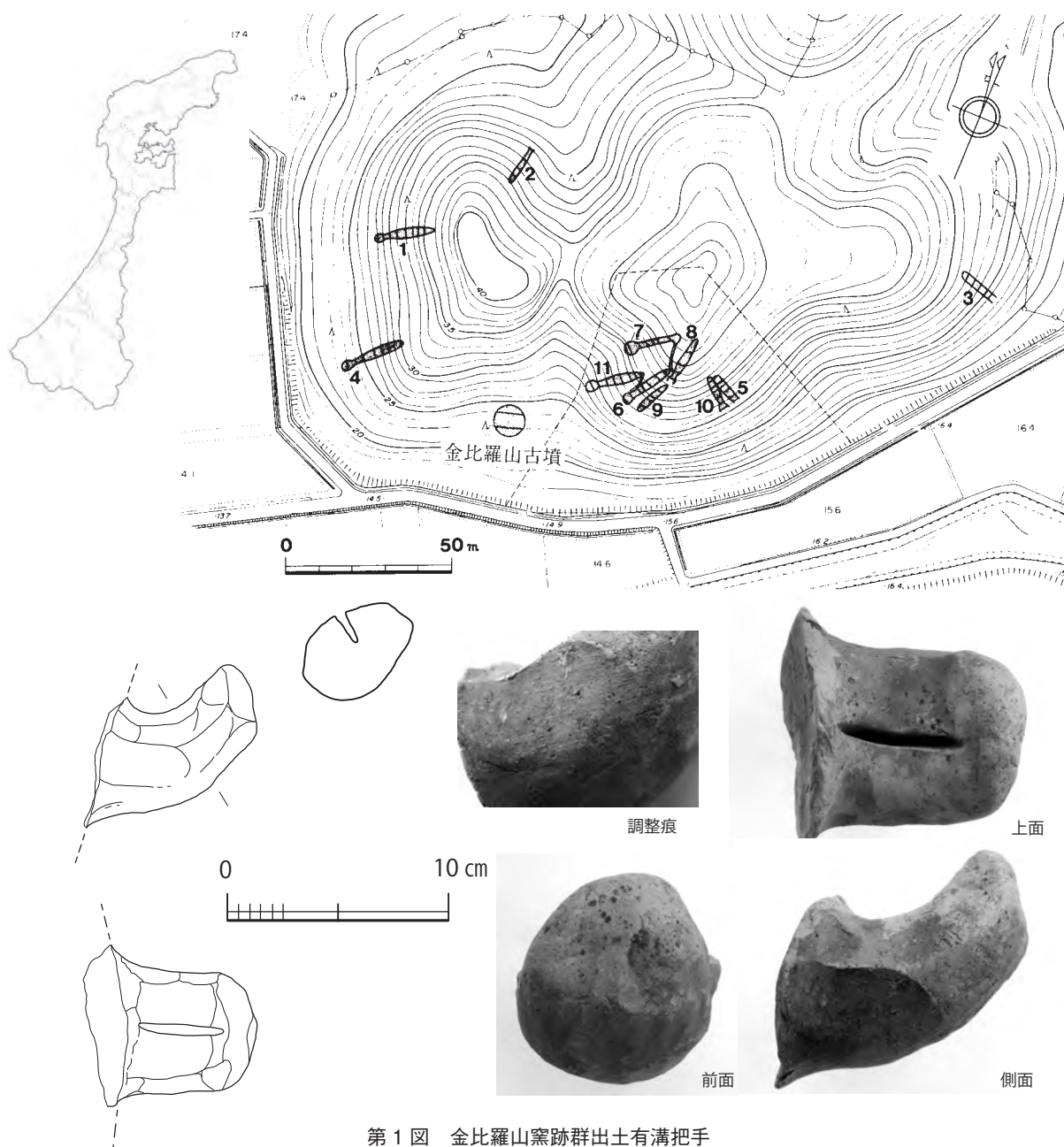
胎土は精良で、0.5mm程度の石英の小粒や微細な長石粒を含んでいる。焼成は悪くやや軟質で、内外面及び断面とも灰黄白色を呈する。いわゆる生焼けである。出土地点は攪乱層だが、焼成具合から、本窯跡群で焼かれた製品であり、灰原等に廃棄されたものである可能性が非常に高い。

6号窯跡窯体内最終床面からも有溝把手を持つ須恵器のコシキが出土しており、資料集に実測図が掲載されている⁽²⁾。実測No.84247と注記され、全形の約3分の2が遺存している。焼き歪みがあり、口径19～21.6cm、器高約24cm、底部径8.9cmを測る。実測図口径が19.4cmと小さいのは、把手部分で断面をとり、それを反転して作図したためと思われる。外面にはタタキや内面の当具痕が見られず、体部上半に粘土積上げによる粘土紐の凹凸が見られるので、タタキ調整をおこなっていない。体部外面はカキメ、その後底部からハケでナデ上げる調整を行っている。焼成は良好で灰色を呈し、須恵器質に仕上げられている。胎土は石英や長石を含み、今回の紹介資料と同じである。

6号窯跡からは、口径11～13cmの杯Hとともに、擬宝珠のある口径10cm程度の杯Gが出土している。三方と二方に透かしのある長脚二段高杯もあることからすれば、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期にかかる時期である。

北陸における出土例

石川県で7遺跡、福井県で1遺跡を確認した。新村いづみ、松尾実両氏による渡来系遺物群の集成⁽⁴⁾では、加賀市大菅波D遺跡、金沢市田上西遺跡、中能登町春木黍谷遺跡から切り込みのある把手をあげているが、後二遺跡の切込みが複数本であることにより今回の集成からはずした。大菅波D遺跡出土品は写真図版の集合遺物写真にのみ2点掲載されている⁽⁵⁾。また未報告だが、津幡町加茂遺跡の平成17年度(2005)調査(県調査)で1点出土している⁽⁶⁾。



第1図 金比羅山窯跡群出土有溝把手

(1) 三木 A 遺跡⁽⁷⁾ (石川県加賀市三木町)

大聖寺川が江沼盆地を貫いて海への出口に遺跡が位置する。丘陵裾部に調査が実施され、丘陵からの流れ込みによる堆積が顕著で、有溝把手は古代面への流土 (TK23 型式から飛鳥 I 型式の須恵器まで時期幅のある遺物があり) から出土している。須恵器質だが生焼け製品のため軟質で、内外面が灰黄白色、断面が明灰色を呈する。把手との接合部は内側からの指頭の圧力のために凹んでいる。内外面とも調整痕をまったく残していない。破片同士の接点はない。把手は、指によるナデ成形のようだが判然としなない。胎土には粗い長石・石英粒を多く含み、一見、土師器のような雰囲気がある。

(2) 今江 5 丁目遺跡⁽⁸⁾ (石川県小松市今江町)

本遺跡は、加賀三湖の木場潟に面する月津台地東側に位置する。周辺に御幸塚古墳などの中期末葉以降の古墳が散在するほか、7 世紀以降の集落が展開する。発掘調査では 340m² という小面積ながら、7 世紀～8・9 世紀にかかる多数の掘立柱建物と竪穴建物が検出された。把手内面には指頭を用いて圧着した痕跡が凹みとなっているほか、把手は指による成形である。溝は下面から切り込まれ、上面を突き抜けている。石英・長石のほか黒色粒が目立ち、かつ内外面が瓦質に仕上げられていることからすれば、他の有溝把手と異質な胎土である。朝鮮半島系の可能性も考慮しなければならない。

(3) 指江 B 遺跡⁽⁹⁾ (石川県かほく市指江)

河北潟北東端にあたり、丘陵の谷間に所在する。古墳時代中期後半～後期では祭祀場、奈良・平安時代には宗教的施設が考えられている。有溝把手は、古墳時代中期後半～9 世紀を主体とする G 区河道跡から 5 個、古墳時代中期と 7 世紀代の遺物が出土しない I 区河道跡から 2 個体出土している。

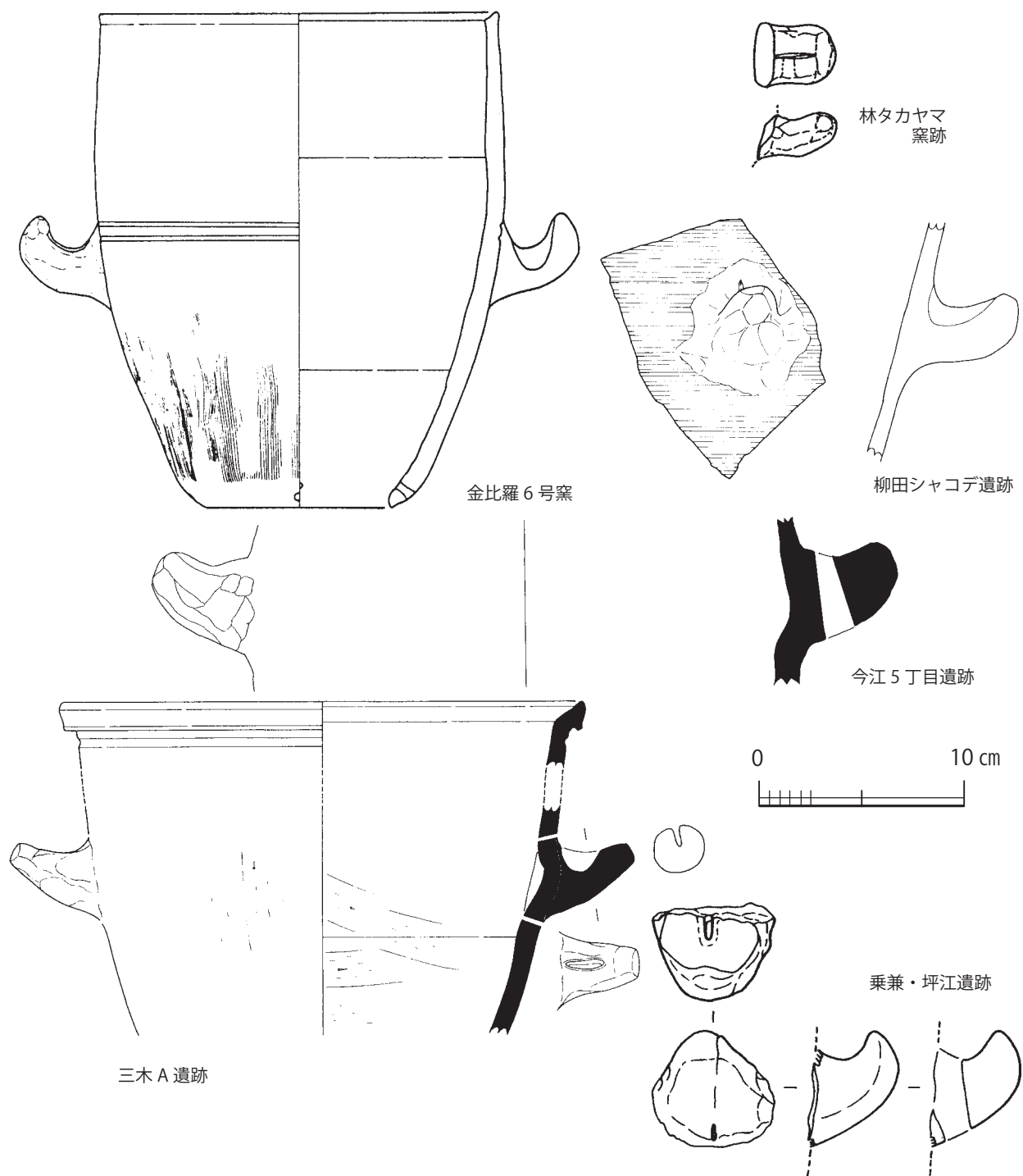
報告 № 55・59 (以下同じ) は須恵器で、59 内外面にはタタキ調整の痕跡が認められ、内面に当具痕、外面にタタキでカキメをその後に施す。55 は内外面黄灰色で、生焼け製品である。他は土師器で 57・459・460 胎土中に海面骨針が含まれている。土師器の一群は須恵器よりも一回り大きく、器種の違いによるものと考えられ、前者は鍋に、後者はコシキに付く把手であろう。時期的な帰属は難しいが、両遺構に共通する時期が想定され、古墳時代中期後葉から 7 世紀を含む後期ないしは奈良時代となる。南加賀で生産された円筒埴輪が出土し、把手付碗やタタキ痕のある軟質韓式土器が一定量出土していることより、古墳時代後期に属する可能性が高い。

(4) 柳田シャコデ遺跡⁽¹⁰⁾ (石川県羽咋市柳田町)

海の正倉院とも形容され、気多神社の前身ともいわれる寺家遺跡の北側台地に位置する。奈良時代のシャコデ廃寺造営前に集落跡が存在し、6 世紀後葉～7 世紀前葉の I 期集落と 7 世紀後葉～8 世紀前葉の II 期に変遷する。有溝把手が出土したのは I 期に属する 10 号竪穴で、須恵器のコシキである。外面にカキメ、内面にナデ調整で、タタキ痕跡は残っていないが、器壁の厚みは一定である。把手は二つの沈線の間に工具でナデつけられている。胎土は長石粒のほか、小さな気泡が入る。10 号竪穴からは、須恵器低脚杯とともに口径 11cm 強の杯 H が出土していることから、飛鳥 I～II 期に属する。出土遺物に窯体壁が付着したものや焼き歪の激しい須恵器があることから、本遺跡の集団は須恵器生産に関わっていることが想定されている。

(5) 乗兼・坪江遺跡⁽¹¹⁾ (福井県坂井市乗兼、坪江)

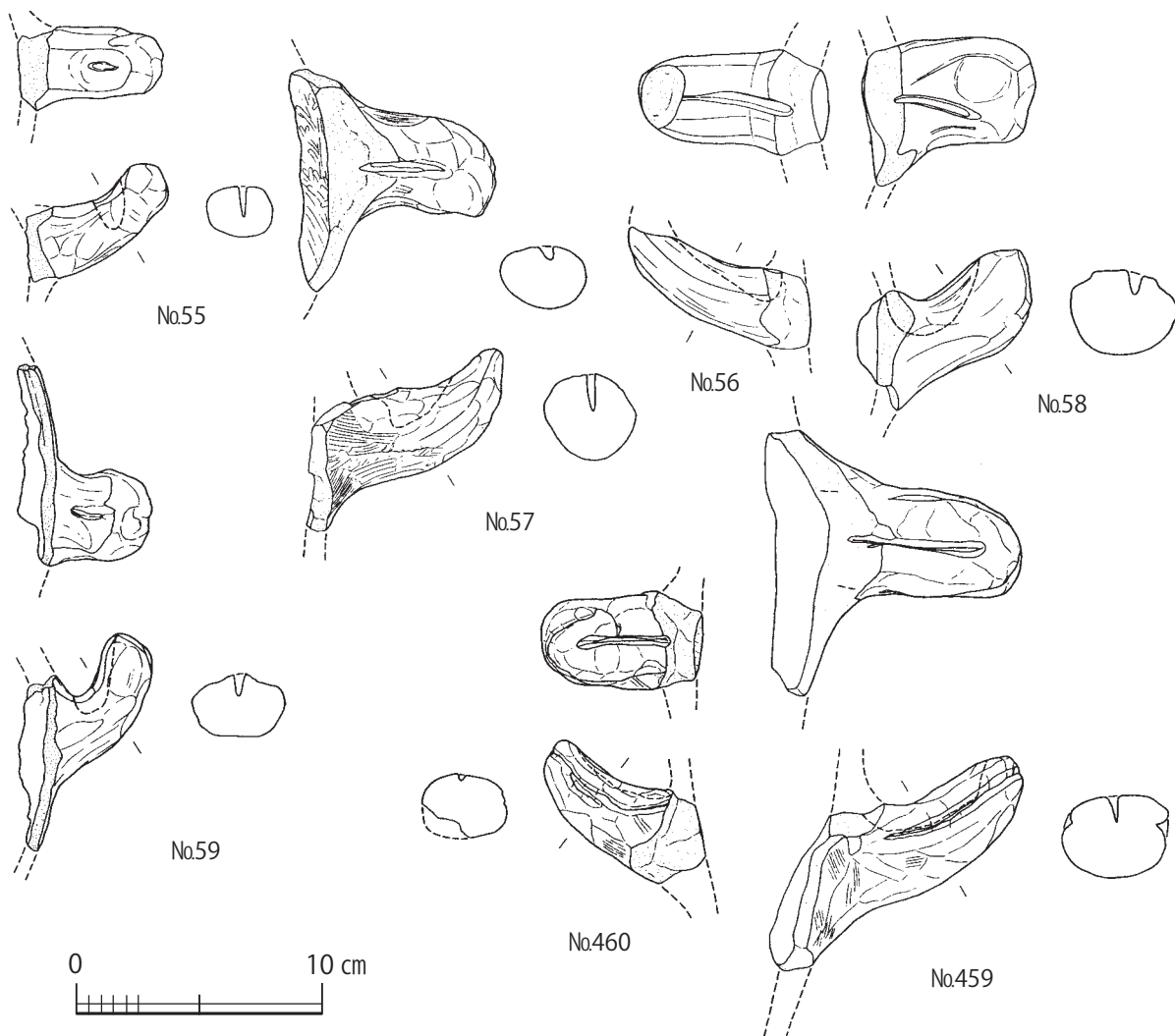
福井県坂井市丸岡町乗兼および坪江に所在し、有名な横山古墳群が立地する丘陵南に接する。7 世紀以降の建物跡が多数確認されている。有溝把手は、1 区とした水路調査のトレンチ調査で検出した溝 SD05 から出土した。把手の一部分のみである。切り込みは下面まで達して突き抜けている。溝は飛鳥 I 期から 9 世紀前葉までの遺物が出土している。奈良時代以降にこの種の遺物の出土が認められないことから、7 世紀ごろの遺物である可能性が高い。



第 2 図 北陸出土の有溝把手

まとめ

今回紹介した有溝把手はわずか 14 例のみである（未報告等含めると 17 例）。有溝把手が渡来人と直接結びつく日常器物のひとつであり、古墳時代地域社会における人の動きなどを直接的に知る資料である⁽¹²⁾。北陸古墳時代における渡来系遺物としては、古墳副葬品に冠帽や耳飾など出土しているものの、集落遺跡からの遺構遺物の検出が不明瞭であったために、いわゆる渡来人の考古学的足跡を確認することは困難であった。わずかに福井県美浜町興道寺窯跡などの角杯形須恵器が注目されていたが、それ以外の器物の認識は非常に浅いものであり、近年、入江文敏氏によって陶質土器を含む集成⁽¹³⁾がなされたものの、資料数の少なさは否めない。



第3図 北陸出土の有溝把手（指江B遺跡）

ところが、小松市額見町遺跡の発掘調査で検出されたL形カマド付竪穴建物が、朝鮮半島からの渡来人の住居であることが明らかにされ、少しずつであるが渡来系の遺構・遺物の確認例が増え、北陸でも渡来人の足跡が認められるようになった。

有溝把手は越前北部から南能登にかけて分布するが、南加賀に多く出土する傾向にある。林タカヤマ例や金比羅山例は須恵器窯跡からの出土であり、渡来系の人々がそれに従事していたことを直接示す。柳田シャコデ遺跡でも須恵器生産との関係が密接であり、加茂遺跡でも加茂窯跡群⁽¹⁴⁾に伴う可能性が高い。つまり、7世紀になって始まる須恵器生産との関係に留意しなければならない。

また、土師器質と須恵器質の二種を確認した。須恵器質は金比羅山6号窯などでコシキ把手としてあり、直接火のあたらない煮沸具に用いられた。土師器質は、胎土に海綿骨片を含むものがあり、須恵器の胎土とは区別され、意図的に土師器としての鍋に製作されたものである。

溝のある把手は、牛角把手といわれるなど古墳時代に限定されるものではなく、一方で新しくは奈良時代の出土例について寡聞にして知らない。古墳時代中期後葉の遺物との共伴例は指江B遺跡などで確認でき、円筒埴輪や把付碗などとの同時代性を評価することができよう。

さらに、金比羅山6号窯など須恵器の時期も定点として押さえられる。金比羅山6号窯の資料群は前述のように飛鳥Ⅰ～Ⅱ期であり、林タカヤマ窯は飛鳥Ⅰ期新相。柳田シャコデ遺跡は飛鳥Ⅰ期、加

茂遺跡もおおむね同時期であり、7世紀前半を中心とする年代におおむね収まるようである。

このように、7世紀におけるあらたな生産活動の始まりに密接な関連がある遺物であることは確実であり、その主体者のひとつに渡来系集団が関わっている様子が推測される。ただし、その出土量の絶対的な少なさは、集団規模の大きさを反映したものとも考えられるとともに、生産活動や王権の政策によって、おそらく複数回に及ぶと考えられる人々の波及の実態⁽¹⁵⁾が複雑であったことを示すことも考えられる。

最後に、本稿をなすにあたり、林 大智氏、宮田 明氏には多くのご教示をいただいた。感謝いたします。

註

- 1 浜野伸雄 1983「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『拓影』13号 石川県立埋蔵文化財センター
福島正実 1984「那谷金比羅山窯跡群第3次調査と銘文須恵器」『拓影』16号 石川県立埋蔵文化財センター
- 2 北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 1988『北陸の古代土器研究の原状と課題（資料編）』
- 3 伊藤雅文 2008「北陸の横口式石槨」『古墳時代の王権と地域社会』学生社（初出 1993「北陸における終末期古墳の研究」『網干善教先生古希記念考古学論集』）
- 4 新村いづみ・松尾実 2006「北陸地域における渡来系遺物群の集成」『石川県埋蔵文化財情報』第15号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 5 西 英晃 2002『大菅波D遺跡』加賀市教育委員会
- 6 林 大智氏のご教示。
- 7 垣内光次郎他 2009『加賀市 三木A遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
- 8 宮田 明 2000『今江5丁目遺跡』石川県小松市教育委員会
- 9 久田正弘・大西顕ほか 2002『指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
- 10 河村好光 1984『羽咋市柳田シャコデ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 11 中川圭三ほか 2006『乗兼・坪江遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 12 亀田修一 2012「渡来人」『古墳時代研究の原状と課題』同成社
- 13 入江文敏 2011「北陸地方出土の朝鮮半島系土器」『若狭・越古墳時代の研究』学生社（初出：2008『郷土研究部活動報告』第4号 福井県立若狭高校郷土研究部）
- 14 加茂窯跡群は平成22・23年度に調査され、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期の複数の窯跡からなる。窯が作られた丘陵斜面は地すべりが頻発し、窯体の一部が損壊している。加茂遺跡形成と期を一にしているから関連性が注目されるが、現在未報告。以下の文献がある。（財）石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』第25号（2011）、同28号（2012）
- 15 筆者は、古墳時代、特に後期・終末期における広範な人の移動を想定している。（伊藤 2008「高志国形成に関する予察」註3文献所収）